「御霊による一致」

エペソ人への手紙４：２－３

July.30.2023

エペソ人への手紙４：２－３（パワポ）

Preface

「あの人は愛せないけれども、神さまのことは愛している」、「あの人はなんだかいけ好かないし、受け入れることも、一緒に何かをやることも嫌だ。でも、イエス様のことは愛している」、「こんな私を愛して下さるイエス様には心がほんわかするけれども、あの人を、あんな人を愛しておられるイエス様を想像することは出来ないし、考えると腹立たしくさえ思えてくる」ということ程、矛盾していることはありません。

私はサーフィンが好きで、ほぼ毎週月曜日の早朝、夏場は３時頃、冬場は４時頃家を出て、サーフィンをしに海に行きます。

でもそんな私がもし、「サーフィンは大好きで愛して止まないんだけれども、海は嫌いなんだよね」と言ったら、どうでしょうか。

そんな矛盾ないですね。

海が嫌いで、海に入ることが嫌ならば、サーフィンは出来ません。

そしてサーフィンが好きならば、自然と海も好きになります。

私は１５年前、初めてサーフィンをしに、教会員の平本さんに海に連れて行って頂くまで海が嫌いでした。

暑いし、日焼けで背中は痛くなるし、海水はべとつくし、夏の海はイモ洗い状態だしと、正直海は嫌いでした。

小学校５年生の夏休みに行った千葉県の岩井海岸への臨海学校以降、一度も海水浴に行ったことがありませんでした。

その代わりに山に行き、冷たい澄んだべとつくことのない綺麗な川に飛び込んで遊んでいました。

夏に入る川の水が大好きで、どれくらい好きかと言いますと、泳げるような川の無い筑波山の、我が家の幼かった子ども達も入ることを躊躇するような小さな小さな小川に、海パン一丁で浸かって水浴びをしながら家族一同にドン引かれるぐらい夏山の川が大好きでした。

でも初めてサーフィンをするために、夏の茨城の海に入った時、感動しました。

サーフィンが楽しくて仕方ないのはもちろんのことなんですが、茨城の海は海水温もそんなに高くなく、水も澄んでいて、日差しも千葉海に較べれば優しく、クラゲに刺されることなんか滅多になく、砂や海水もペットボトル１本分の水で綺麗に洗い流せ、たまにスナメリというイルカの仲間も見ることが出来る。

サーフィンをするようになって、海が大好きになりました。

サーフィンをしなくても、ハマグリを取ったり、釣りをしたり、ただ海風にあたりな

がらボーっと海を眺めたりと、以前の私では考えられないくらい海が大好きになりました。
　今では、海なしの生活は考えられないぐらいです。

Part One

　これと同じようなことが、イエス様を信じると起こります。
　特に、人間関係において、人を見る目において大きな変化が起こります。

　それまでは、「何なんだこの人！　何でこんなひどいことを平気な顔してやりのけることが出来るんだ！　なんてずるいんだ！　なんて嫌な奴なんだ！　なんて間違っていることをしているんだ！　こんな人は滅びてしまってもいいくらいだと思うし、いなくなってしまっても当然だ！」と思っていたような人に対しても、情けと言いましょうか、かわいそうと言いましょうか、同質、所詮同じ悪さを持っている弱い、同じ罪深い人間であり、そういうことになっているのにも、何らかの人には簡単に言えないような傷や境遇や背景や体験があるのだろうし、神の赦しと慈しみと受容がなければ、平安もなく、本当の意味での自己受容もなく、我が人生の意味や使命を見出せずに、暗闇や靄がかかったような感じを拭うことが出来ずに死に生きてしまうような同じ人間なんだと、腹立たしさはちょっと横に置いておいて、怒りよりも同情の思いが湧いてくるようになります。

　群衆に石を投げつけられながら死んでいったステパノの言葉を、一度思い出してみて下さい。
　自分のことを血眼になって殺そうとしている人々のために、「主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい」と祈りながら、殉教していきました。
　イエス様が、不条理な訴えによって十字架に架けられ死に行く時、「父よ、彼らをお許し下さい。彼らは自分が何をしているのか分かっていないのです」と、最後の最後まで、その劣悪で、残虐な人々のことを「可哀そうだ」と気遣わずにはいられない思いを心に秘めて、亡くなって行かれました。

　このイエス様の心が、ステパノにはありました。
　イエスの心がステパノの心となり、ステパノの心がイエスの心に重なり合ったのです。
　そして、その主イエスの心となったステパノの実りが、ステパノを殺すことを主導し、ほくそ笑みながらすぐ目の前で眺めていた使徒パウロでした。
　「主よ、この罪を彼らに負わせないで下さい」という祈りの応答が、使徒パウロの回心でした。

　「嫌ならば離れてしまえばいいし、切り捨ててしまえばいいし、関係を断絶してしまえばいい」と当たり前のように思っていたところから、関係が切れてしまうことに、または、関係が切れてしまいそうになることに、心が痛むようになり、相手の間違いよりも自分の間違いが妙に心に浮かび、自分の間違いを正直に告白して、自らを遜らせて

も、その関係を維持したい。
「せっかくイエス様ゆえに一つとされたんだから、何としてでも一つとされたことを保ちたい」と願い、そう行動しなければ心が落ち着かず、そう行動したいという衝動に、主イエスを信じたならば駆られるようになります。

辛辣な第一コリントを書いたパウロが、慰めの第二コリントを書かずにはいられなかった心情と言いましょうか、「サーフィンは好きだけれども、海は嫌いだ」というような矛盾が矛盾だと思えるように、神を中心とした人間関係を考えた時にも、矛盾だと思えるようになります。
「あの人は愛せないけれども、神さまのことは愛している」、「あの人はなんだかいけ好かないし、受け入れることも、一緒に何かをやることも嫌だけれども、イエス様のことは愛している」、「こんな私を愛して下さるイエス様には心が温かくなるけれども、あんな人を、あの人を愛しておられるイエス様を想像することは出来ないし、考えると腹立たしくさえ思えてくる」という思いや行いが、矛盾だと感じるようになります。

その人も、自分と同じようにイエス様が愛おしく可哀そうに思っておられる存在であり、もしその人がキリスト者であるならば、なおさらその人なくして私という人も存在し得ない、「キリストをかしらとする一つのからだとされた」という深遠な神の愛の御手を否定することが出来なくなります。
それが、エペソ書４：２－３の「御霊による一致」ということです。

Part Two

パウロは、エペソ書４章１節から１６節に至るまで、ずっと「一致」と「一つ」ということについて語っていきます。
なぜか？
「一致」と「一つ」ということこそが、神の救いの目に見える形・外見・顕れであるからです。
そして、私たちの信仰の実践、行いそのものであるからです。

イエス様が、「わたしはあなたがたに新しい戒めを与えます。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。愛し合い、一致し、一つであることをもって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるようになります」と仰った通りです。
イエス様が十字架に架かられる前夜、血の汗を滴らせながら祈った祈りでも、「父なる神よ、わたしがあなたと一つであるように、彼らも一つにして下さい。彼らが一つであることを通して、わたしがキリストであることを、世が信じるようになるためです」と祈られました。
即ち、天地万物をお造りになった父なる神が天地創造の前から、「ひとり子イエスをこの世にお送りになる」とご計画された時、その御旨に意図しておられた具体的な目標・目的こそ、「一つにする」ということでした。

エペソ人へ手の手紙１：９－１０（パワポ）

キリストにあって、天にあるもの地にあるもの一切のものを一つに集められることこそ、神の救いの第一となる目的です。
私たちのたましいが救われることは、神の救いの大事な中枢をなす内容であることに変わりはありませんが、もっと正確に言いますと、「救い」とは、私たちのたましいが救われることが目的ではなく、すべてをキリストにあって一つに集めるという目的をなす上で、必要不可欠な大事な一過程、一要素として神さまが見なして下さっているということです。
つまり、私たちが救いの主役ではなく、キリストが救いの主役であられ、主役なるお方が「一切のものを一つに集める」というその目的を果たすために、私たちを呼び出したのが、私たちに起こったたましいの救いだというわけです。

なので、その一つに集めるという救いの目的のために呼び集められた私たちには、神から期待され、望まれ、世にその違いを見せるべきことが、やるべきことがあるということです。
私のたましいがキリストによって救われたならば、天の御国に行ってからではなく、今この人生、今この日々の暮らし、今この交わりにおいて救いを体現していくこと、「一つとされたということを保つこと」こそ、救われたキリスト者として当然やるべきことであり、やりたいと思えることであり、もし、一つであるということに反することをしているならば、心の置きどころがない、心地が悪い、または不自由さを感じるようになるでしょう。
なぜか？
聖霊が私たちのうちにおられ、聖霊は私たちを一つにされる根本なる、原因なるお方だからです。
その方の働きかけや語り掛けに真正面に向き合うならば、一つであれないことに、一つであることを保とうとしないことに、心の居心地の悪さを感じることになるでしょう。

Part Three

では、聖書が私たちに見せてくれる罪の形・外見・顕れとは何でしょうか？

分裂です。
家族、または夫婦は、人間社会を共同体と考えた時の最小単位ですが、人類史上最初の最古の家族・夫婦という最小単位だったアダムとエバ夫妻は、神とともに生きることを拒むという本質的な罪によって、致命的な夫婦間の分裂を経験しました。
それからと言うもの人類の歴史は、分裂分派、争い、競争、闘争、党派心を繰り返し続けてきました。
今も、私たち人間、その置かれた場で、分裂分派、争い、競争、闘争、党派心を引き起こしながら生きています。

教会でさえもそうです。
キリスト教は一般的に、大きく分けてカトリックとプロテスタントに分けますが、私たちプロテスタント教会が５００年前にカトリック教会から出て来て、その間、どれだけ多くの論争、戦い、闘争、分裂、内紛を重ねてきたことか分かりません。
もちろん、主なる神さまは、私たちのそのような党派心による分裂さえも、多様性としてお用いなさる慈しみ深いお方でありますが、袂を分かったという私たちの罪ゆえの分裂の事実は、しっかりと、深刻に受け止めて行かなければならないでしょう。

私が卒業した神学校の名前は「合同神学大学院大学校」と言いまして、「合同」という言葉が学校の名前に入っております。
なぜかと言いますと、色々な事情で袂を分かち、新たに開校した神学校であったため、いつの日か、また主イエスにあって、一つの神学校として合わさり歩めればという願いを込めて、「合同神学院」という名前にしたそうです。
それから４５年が経ちましたが、未だに二つの神学校は合わさっておりません。
「主イエスが再臨されるその日まで、もう二度と、二つの神学校が一つになることはないでしょう」と、私が通っていた当時の学長先生が悲しげに仰っていたことを今でも、はっきりと覚えております。

一つであることを拒みたい我が、私たちのうちには確かにあります。
そしていつの間にか、私たち人間の我と党派心を、神がお造りになった天然世界にまで反映させて、弱肉強食、自然淘汰、適者生存などと宣いながら、自分たち人間の罪なる価値観に天然世界を引き込み、巻き込み、染めるようなことまでしでかし、二進も三進も首が回らない状況にまで天然世界さえも追いやってしまいました。

「なぜ、聖書には、こうも多くの戦争や殺人や争いや妬みや分裂が記録されているのだろうか？」と、あたかも自分とは関係のない世界がそこに描かれているかのような錯覚を抱きながら、上から目線で聖書に疑問を呈することがありますが、聖書に記録されているその血みどろな人間ドラマこそ、私たち一人一人の姿です。
そして、そんな殺伐とした人間世界に、神さまが遠く離れて眺めておられるように高みの見物をするような事はなさららずに、その争いの真っ只中に、その分裂分派の真っ只中に、その妬みや競争や殺人の中にいちいち関りを持ちながら、人間のことを見捨てようとはなさらないので、あたかも聖書に、特に旧約聖書に描かれている神さまが好戦的に見え、殺人を促しているように見え、争いを引き起こさせているかのように見えるのです。

でも、内実は全く違います。
私たち人間が、人間の罪が神様を巻き込み、神さまは誤解を受けることまで良しとされながら、人間社会に自ら進んで巻き込まれて行き、関りを持ち続けられ、その関りの極致として、神の御子イエス・キリストをこの世にお送りになり、十字架に架け、死なせるということと、聖霊を罪なるこの世界に、私たち人にお与え下さるということでした。

ローマ書５章で、「正しい人のためであっても、死ぬ人はほとんどいません。善良な人のためなら、進んで死ぬ人がいるかもしれません。しかし、私たちがまだ罪人であった時、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます」と言っている通り、神さまは、人間世界に対して、人に対して、愛を表し続けて来られただけです。

この事実を私たち、謙遜に、遜って考えて行かなければなりません。
「私は救われたから、もうそれで満足！　私の罪は赦されたから、万事ＯＫだ」と、イエス・キリストを信じ改心したその過去の体験にすがりながら、そのことだけを何度も何度も自分の中で反芻し思い返しながら、過去のその喜びや恍惚状態に留まり続け、自分が救われたことのみに執着し、あとは、天国に行くまでの余生を費やすかのようにクリスチャンライフを生きるのは、イエス様が、使徒パウロ先生が教えて下さっている救いを生きるクリスチャンライフではありません。
前進、進行、進み、新たな発見とともに、日々新しい神の愛への気付きと奥深さと遜りと、人を見る目や態度や関係に変化と成熟が見られて当然なのが、クリスチャンライフです。

Part Four

前回の説教の中でもお話ししましたが、私たちキリスト者たちは、呼び出された者たちです。
意図あって、目的があって、呼び集められた者たちですね。
何のために呼び集められたのか？
４：１にある通り、召されたその召しにふさわしく歩むためですね。
２：１０では、このように言っています。

エペソ人への手紙２：１０－１９（パワポ）

私たちが召された理由、キリストにあって古いものが過ぎ去り、新しく造られた理由、キリストから遠く離れれており、イスラエルから除外されていた神もない者だった私たちが、神との間にある、人との間にある隔ての壁という敵意をキリストの血によって廃棄させて頂き、平和を知り、御霊によって一つとされ、神の家族とされた理由は、「良い行いをするため」です。
天国に行くためではありません。
天国に行く前にやるべき「良い行い」があるために、召され、新しく造られ、一つとされ、今ここに生かされております。
そして、その「良い行い」こそが、「一つであることを御霊によって熱心に保つこと」です。

「行い」という言葉で言い表されているからには、そこには動きがあり、前進があり、過去の栄光や喜びに浸り続け、現状に甘んじてよいということにはなりません。
やるんです。　なすんです。　何を？

謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに耐え忍び、平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保つことです。
「一致しなさい」とは言いません。
「御霊によって一致を保ちなさい」と言います。

私たちは、自分の力では一致できません。
自分の力で一致をしようとすると、また結局争い、分裂してしまいます。
良いことをしようとするのにも、往々にして、結局争ってしまうのが私たちです。
だから、御霊が一致させて下さいました。
私たちは、一致しようと努めるのではなく、一致させて下さったことを保つのです。
神さまのことを、イエス様のことを、聖霊様のことを考え、知ることが、一致を保つことの始まりだということです。
だから、神さまは何度も、「わたしを知りなさい。唯一の神を知りなさい」と仰るんです。

自分のことを、相手のことを、人間のことを考えたところで、嫌なことばかりが思い浮かんでしまうのが私たち人間です。
御霊のことを、御霊がしてくださったことを、御霊の言葉にならない呻きを知り、聞くのです。
私たちの度量や人格による一致は、残念ながら有り得ません。
私たちの度量や人格はたかが知れているからです。
そのため、この世で叫ばれている一致やこの世の方法による一致には限界があり、必ずや隔たりを迎えてしまいます。

使徒パウロがエペソ書で語っている一致は、そういう世的な次元の話ではありません。
御霊による、つまり、神との関係の深さによって、分裂してしまった罪なる世界に今一度、新たに、完全な一致を神が成し遂げなさるということです。
そのような一致を知っているはずのキリスト者には、最初に話しました「あの人は愛せないけれども、神さまのことは愛している」、「あの人はなんだかいけ好かないんだけれども、イエス様のことは愛している」、「私を愛して下さるイエス様は素晴らしいけれども、あの人を愛しておられるイエス様のことを想像することは出来ない」ということが、どれほどつじつまが合わない矛盾、言いぐさ、信仰姿勢なのかということが、一目瞭然となって迫ってくるようになります。
そして、御霊によるという人間が体現できる唯一の一致を、一つになるということを世に表すのです。

Part Five

マタイの福音書１１：２８－２９（パワポ）

エペソ書４：２の「謙遜と柔和の限りを尽くし」という使徒パウロの言葉は、イエス

様の「わたしは心が柔和でへりくだっているから」という言葉を思い浮かべながら語った言葉であるだろうことが見えてきます。

即ち、「謙遜と柔和の限りを尽くし」とは、イエス様の心が私の心となること、私の心がイエス様の心のように合わさること、イエス様のことを知っていくことです。
主イエスを知れば、自分を蔑む道以外の道は見つかりません。
主イエスを知れば、自分が折れること以外の道は見つかりません。
主イエスを知れば、全然分かっていないのは自分の方だということが分かってきます。

主イエス様は、天地万物をお造りになった神の御姿なるお方であるにもかかわらず、「わたしは父なる神が仰る通り、お示しになった通り、望まれるとおりのこと以外は知らないし、しない」と仰いましたが、そのイエス様の謙遜さに倣うとは、「私はまだ何も知っちゃいない」ということを自ら認めることでしょう。
私の実力、私の知識、私の知恵によって判断を下せるものなんか、何一つないんだということを認めることでしょう。

そして、待つようになります。
待てる余裕のことを、謙遜とか、柔和とかと言います。
待つとは、受け入れる余裕のことですね。
今の状態や状況では、相手を打って、叩いて、批難しなければならないんだけれども、待つ。
私が嫌いで、憎んでいるあの人を咎めなければならないことを待つ。

謙遜と柔和とは、最終決裁者のその力と実力を認め、それを元に、その方に対する深い信頼が持たせてくれる余裕です。
言うなれば、私たちが謙遜になり、柔和になるには、信仰なくしては有り得ません。
神なるお方に対して、私たちがどれ程に信頼し、信じているのかということに１００％かかっているのが、謙遜と柔和です。

よくよく考えてみますと、私たちが良い行いや召しにふさわしく歩めていない最も大きな理由は、神を知らないからです。
神について知らないからです。
その方を信じているようで、信じていないからです。

私たちはもう既に、エペソ書３章に至るまで見てきましたように、驚くばかりのプレゼントと所有と恵みを頂いている祝福の中を歩んでいる者たちですが、そのことをどれ程に認識出来ているでしょうか？
それを認識出来た時に出て来る余裕が、謙遜と柔和と寛容と御霊による一致です。

これから新しく与えられるものや、新しく作り出すものや、新しくやることすること

よりも、キリスト者たちにもうすでに与えられている豊かなものを保つことによって、さらに豊かにし、さらに豊かになるのです。
　なのに私たちの信仰は、意外にも消費的で、与えられたら次、また与えられたら次と、保つことよりも与えられ続けることに執着するから、余裕が無くなってしまうのでしょう。
　あたかも、世の中の消費的世界に染まった価値観のようにです。

Conclusion

　私たちは誰も足りないですし、誰も不器量で、愚かです。
　でもこうして、キリストの教会として、ひとつ所で出会ったことだけでも、十分に喜べる祝福です。

　皆で一つで、同じ御霊にある存在で、今はまだどうしようない程の存在かもしれませんが、神さまが練っておられる最中ですし、作業中です。
　そして、必ずや一つに完成させて下さいます。
　その期待が、私たちにはなければならないでしょう。
　そして、その神への期待が、私たちの余裕であり、謙遜と柔和を生み出します。

　御霊の一致を壊そうとするサタンの誘惑を、ぜひぜひ見極めて下さい。
　その誘惑を見極めたならば、神への信頼をもって、余裕を持って下さい。
　キリストをかしらとする教会に立ちふさがることの出来るものは、何一つございません。
　神の子、神の聖徒たちに対する神の愛と祝福と計画を変更できる者は、誰一人としていません。
　私たちには、揺るぐことのない希望と将来があります。
　その栄光の道を、神の子らしく歩んで行きたいと願います。

　お祈りいたします。

　祝祷：エペソ４：２－３